

意識の広がり

プラトンが「洞窟の比喻」で表しているように、感覚的知覚（ギリシャ語でドクサと言い本来臆見を意味）は、想像力に富んで生き生きとした思考（アイデア）の影に過ぎません。シュタイナーは、ドイツ系の理想主義とロマン主義に傾倒し、直感的な思考の事をイマジネーションと呼びました。しかし、彼はイマジネーションができる精神世界を超えたところにあるとした靈感や直感など、より高次の認識方法を編み出すことで、ロマン主義の一步先に進みました。プラトンの比喻を拡大解釈することもシュタイナーの考えを理解する良い方法の一つです。たとえば、靈感とは、私たちの通常の感情が単に何かの影でしかないと認識することであり、私たちは意志を使って靈感の影を見るのです。私たちは大抵、感情をはっきりと意識しておらず、意識は私たちの意志の奥で眠っています。しかし、鍛錬をすればこうした高次のレベルでも意識を起こすことができるのです。

シュタイナーは、フロイトやユングのように、無意識を意識的にすることができる、むしろそうあるべきだと唱え、そのための高次元の知識につながる方法があると説いています。フロイトは、個人的無意識を解明し、それが意識よりずっと大きく、より強力で、より身近であることに気付きました。彼はそれを「ハイパーネスティック（驚くほど鮮明で正確な記憶：超記憶）」と呼んでいました。ユングは、そこからさらに踏み込み、トランスパーソナル無意識（集合的無意識）の存在を発見しました。シュタイナーの精神心理学を理解する際、フロイトやユングの考え方を広げ二つの違った角度から理解する必要があります。まずシュタイナーが言うところの「精神(心)」は、「自然が無意識でいる状態」であるということ、またかつて起こった事柄全てが「廣大無辺の記憶」であるということです。

プラトンやフロイト、あるいはユングのように、シュタイナーは人はより高いレベルの知識を得て精神的に通じた人々が、目にし、伝えて来たことを、自ら検証できるようになるという徹底的な方法について説明しています。この広大で宇宙的な無意識は、「瞑想」をすることで少しずつ現れてくるのです。「瞑想（メディテーション）」という言葉は、ラテン語の動詞に語源を持ち、単純に、「練習をする」という意味です。時間をかけて練習することで、より高次の認識の境地に達することが可能となるのです。シュタイナーの四大主著の一冊の冒頭に、まさにこれについて述べられています。「人類の誰もが、より高次の世界の知識を得る能力を内に秘めています。」

過去の英知の再生

シュタイナーの研究によって、人間の本質や世界の歴史に関する深い理解が得られました。シュタイナーは、まず、人間は身体だけではなく魂と心が集まってできた三位一体であるという古くから伝わる神秘的な見方を詳細に説明しました。何世紀にも渡り、人類が物質社会にどっぷり沈み込んでしまった一方で、元来持っていた高次の世界への興味が失われてしまいました。シュタイナーは、西暦八六九年に行われた（第四）コンスタンティノポリス公会議の事をしばし引き合いに出しては、その会議で人間の精神（心）について語ることは異端であるとされたことが歴史上重大な過ちであったと語っています。かくして人間性がさらに希薄となり、一九世紀に至るまでに物質主義がはびこり、魂の存在すら認められないようになってしまいました。

シュタイナーにとって、物質主義と戦うことこそが課せられた最初の使命でした。人間性は、精神世界の長い日食のように暗く隠された状態の中で、物理的世界にしっかりと足をつけることができるようになってからこそ、自主的な存在となるとも説いています。懐疑主義と物質主義は近代の発展にとって必要な道程でしたが、最終

的には近代性は懐疑主義と物質主義を越えなければなりません。物質主義の恩恵が与えられ、それが有害になってしまった今、人間性はより高い品性と、新たに身につけた自主性を通して見えるようになった世界との正しい関係性の模索が必要となるのです。

進化論

こうしたシュタイナーの近代の見方は、彼の考えのごく一部にすぎませんでした。彼の偉大な成果として「意識の進化」についての解説があげられます。これは、さまざまな著書や講義の中でみられるテーマとなっています。意識の進化論の中で、シュタイナーは前史時代にある「宇宙的自覚」の進化と呼んでいたものについても説明していますが、歴史的記録のあるものをより一層研究しています。いずれにしても、どちらの説明も想像を超えるほど壮大です。

シュタイナーは、進化論について肯定的でしたが、ダーウィンの言う進化論とは違っていました。シュタイナーは、ダーウィンの進化論に敬意を払いつつも、そこから進化論的宇宙論とも呼ぶべき自分の研究へとつなげました。ダーウィンの理論はシュタイナーの大きな構想のほんの一部を捉えていたにすぎません。シュタイナーは、この壮大なドラマを、四大主著の最後の本「神秘学概論」の第四章で解説しています。しかし、その内容は彼の著書の中でも最も複雑であると言われるほど難解ではありますが、メインとなることはいくつかのポイントにまとめられます。

ダーウィンが徐々に複雑さを増す生物形態が少しずつ上に向かって進化を遂げて行く様を地球レベルで説明しているのに対し、シュタイナーは精神的主体がそれぞれに適した器に徐々に降りて来る様を精神的な面から説明しています。他にもシュタイナーは、著書「神秘的科学」にて異なる視点での宇宙観の説明をしています。シュタイナーは、まるで神の視点で物事を見ているかのように五つの講義の中で驚くほど明快に解説しています。シュタイナーは、人間性というものはトップダウンで作られた一方で、現在地球上に存在するものは「輪廻転生」によってボトムアップで進化したと言っています。

進化にはいくつかの通過点があります。無限に長い時間をかけて、人類は単純なものから複雑なものへと、無意識から自覚へと、受け身から自主性へと、そして、必然性から自由へと変化を遂げました。英知という贈り物を受け取った今、その英知を吸収して自発的な愛に変化させることが私たち人類に課された任務です。しかし、そのゴールに近づこうとすればするほど、成果がわからなくなってしまうのが自由の矛盾した点です。なぜなら、次の進化を遂げるための方法が私たち人類の手に一任されているからです。

一九〇六年から十年間に渡り、精力的にヨーロッパを見て回ったシュタイナーは、神智協会のメンバーや、その後新設された人智協会向けに関係者向けの講義を行い、精神研究の観点から文化史のあらゆる点に関し、特に意識の進化について説明しました。

シュタイナーの数百冊にも及ぶ著書にまとめられた講演にみられるこの新解釈は、知の歴史全般を見ても類を見ないほどの素晴らしい業績で、それが網羅する内容や精密さはアリストテレスやアキナスの偉業に匹敵するものだと考えられます。シュタイナーが人類の歴史を書き換えたと言っても過言ではないでしょう。むしろシュタイナーが、歴史編纂に全く新たな側面を付け加えたと言った方がより正確なのかもしれません。シュタイナーの説明する「意識の進化」は、単なる思考の歴史を超越しており、内容だけではなく、意識の構造そのもの、つまり

主観と客観の関連性そのものが時間をかけて根本的に変わってきたのだと唱えました。これについて、シュタイナーはさまざまな著書の中で詳しく説明していますが、オーウェン・バーフィールドの著書「Saving the Appearances: A Study in Idolatry（体面を繕うこと：偶像崇拜学）」がシュタイナーの考えを的確に要約・解釈し、そこから普遍性を示したことは何ともありがたいことです。

芸術における精神性

シュタイナーは、芸術方面においても精力的な取り組みを行いました。実際、このことがシュタイナーと他の神智学者たちとの間で発生した意見の食い違いの主な原因の一つとなりました。アニー・ベサントの反対を押し切って、シュタイナーは一九〇七年の神智会議をアバンギャルド・アートフェスティバルにしようと試みました。最終的に、ミュンヘンで一九一〇年から一九一三年までの四年間、シュタイナーのキーとなる考えが多く織り込まれた表現派「ミステリー・ドラマ」を四作品制作・演出し、新たに設立された人智協会を率いようとしていました。晩年、シュタイナーは、芸術面での活動をもっと充実させるべきであったとさえ言っています。

第一次世界大戦勃発直前、ミュンヘンに活動の拠点を建設しようとしたものの不成功に終わり、一九二一年に起こったナチスの前身による暗殺未遂を含む戦後の混乱のなか、スイスのベーゼルに近いドルナッハに協会の本部建設の招聘を受け、それを受け入れました。シュタイナーは活動の本拠地をドイツからスイスに移したのです。これは振り返ってみると大変幸運なことでした。ナチスは後に協会と活動のすべてを禁止しましたが、シュタイナーの活動はドルナッハで生き延び、今でも人智学活動の国際的な中心地になっています。

一九一三年からの一〇年間、シュタイナーは大規模な建物の建設に携わりました。それは、大部分が木を削ってできたもので、どこか建築と彫刻の間のような、あるいは、劇場と神殿の間のような印象を受けます。シュタイナーは、英国人彫刻家エディス・マリオンと共に彫刻作品群の製作に取り組み注目を浴びました。また、二連キューポラの内部壁面の設計と塗装も自ら手がけました。この建築物はゲーテアヌムと呼ばれ、ゲーテの思想の中で最も重要視されている事物の変容を象徴しています。また、シュタイナーのドラマを上演する機能も備え、ゲーテのファウストも五日間連続ノーカットで演じられ、他の演劇や音楽のコンサートも行われました。さらに、シュタイナーが新たに考え出した二つの芸術様式の上演も行われます。オイリュトミーと呼ぶダンスのような動きをするアートと、クリエイティブ・スピーチという朗読のアートです。この二つは、音楽と言語のニュアンスを具現化するために考えられました。

オイリュトミーは、舞踊の歴史において非常に重要視されていますが、不当に見過ごされてきました。それは、ヨーロッパでなくアメリカで始まった芸術革新の延長上にありました。新たな舞踏が生まれる最初の衝動というのは、人間の心のずっと深いところで始まります。ウイグマンやグラハムやハンフリーのいわゆる「モダン・ダンス」とはわけが違い、オイリュトミーは「新しい舞踏」を継承するものであると考えられます。そこには、ロイ・フラーの精神科学的要素や、イザドラ・ダンカンのアポロとディオニソスの中間のバランスのとれた状態や、ルース・セント・デニスの東洋的精神が織り込まれています。

シュタイナーはまた、美術史家たちから重要な建築家だという高い評価も得ています。不幸にも、シュタイナーの第一ゲーテアヌムとして現在知られる建築物は、一九二二年大みそかに放火によって焼失しました。シュタイ

ナーは第二ゲートアナムを設計しました。この第二ゲートアナムは、彫刻的な形状を再現するためにコンクリートを用いて建築され、彼の死後ようやく完成に至りました。

建築家ハンス・シャロンは、この第二ゲートアナムを、「二〇世紀前半におけるもっとも重要な建築物」と称賛しています。シュタイナーの大胆な印象派的作品は、「有機的機能主義」と呼ぶのが一番ふさわしいのかも知れません。彼の業績には目を見張るものがあり、今日では、多くの建築家たちが自らを「人智系建築家」と称し、ル・コルビジエによるロンシャンの礼拝堂やフランク・ロイド・ライトによるグッゲンハイム美術館など二〇世紀における最も有名な建築物にもシュタイナーの直接的な影響を目にすることができます。

もし、二〇世紀後半の重要な建築物の多くが印象主義的で、（シャロンが主張しているように）シュタイナーが初期の印象主義的建築家の中で、最も重要な地位を占めていたとすれば彼は時代の先駆者であると言えるでしょう。芸術家でもあるシュタイナーは、ワシリー・カンディンスキーやアーノルド・ショーンベルグ、アンドレー・パールイ、ピクトル・ウルマン、ブルーノ・ワルター、ソール・ペローやヨーゼフ・ボイスなどと言った偉大な芸術家たちにも多大な影響を与えています。

輪廻転生とカルマ

シュタイナーは晩年になってからようやく、西洋にもふさわしい形で輪廻転生とカルマの現実性を伝えるという彼の二番目に大きな使命に全霊をかけられるようになりました。彼が神智学に取り組んでいた時よりずっと後になってからこの仕事に取り掛かったのは、偶然の事ではありません。シュタイナーの主張は、多くの東洋の教えにわずかな類似性しかみませんし、誤解を招くようなことも望んでいませんでした。しかし、これに関する素晴らしい（そして必要な）序論は、『神秘的科学』の「眠りと死」という章の中に見ることができます。

陳腐なメタファーかもしれませんが、睡眠が「小さな死」であるというのは真実で、私たちは毎晩寝ている間、肉体を離れ精神世界に触れます。ただ、朝起きたときにはそのような経験を忘れてしまうのです。これと同じように、私たちは死後、次に生まれ変わるまで精神世界に触れ、生まれ変わる間際に、忘却の川と呼ばれるレテ川の水を飲んで精神世界でのことを全て忘れてしまうのです。ウィリアム・ワーズワースが言うように、人間の死と転生は「単なる睡眠と忘却」に過ぎないのです。誕生の際に新たな生を受けることは、朝、睡眠から目覚めるのと何ら変わらないというわけです。

輪廻転生は意識の進化の道理にかなっており、その逆も然りです。これは誕生時に起こる一見アクシデントのように見える不公平さ（社会的階級、性別、人種、幸運あるいは不運、平和、あるいは戦争、経済先進国など）を解消します。シュタイナーの説明によると、多くの場合、性別は生まれ変わるたびに逆となり、何度も転生を繰り返す内に、いろいろな文化を行き来することで、それぞれの文化から最善のものを吸収することになっている、あるいは、吸収する機会が与えられます。これは、大変斬新的な考え方であり、私たちは誰もが時間をかけて、気づく、気づかないに関わらず、少しずつ世界市民の一員になり、調和のとれた人間となりうるのです。努力（あるいは苦労や苦行など）を通して得た能力は、次の人生で新しい才能として開花するのです。つまり、天才は偶然ではないのです。

次の人生での幸福をただ漠然と約束するのではなく、今生で輪廻転生とカルマが一緒になり目に見える形で正義、そして慈悲がもたらされます。私たちが努力したことは、新たな才能として戻ってきますが、失敗や悪事も転生時にまた巡り、それが偶然起こったかのような形で降りかかってきます。自分がとった行動の結果を肌で体験し、成長と償いのチャンスが与えられるのです。つまり、カルマは恩恵として、自らをより良い人間に磨き上げるためのより高レベルの法則とも言えるのです。シュタイナーは、カルマの法則は非常に複雑で独創的であるため、基本的な講義の中では手短かに説明することども、歴史上人物の伝記を例にとった長編シリーズで解説を試みました。

サンスクリット語の「カルマ」という言葉は、ギリシャ語の「ドラマ」に相当し、シュタイナーは、それぞれの人生とはつまり教訓的なドラマであるということ、あるいは、カルマとはつまり彫刻家が生きた粘土で人生を造形しようとしているようなものだと考えて欲しいと訴えているのです。シュタイナーが言うように、もし「カルマが最も偉大な芸術家」なのだとなれば、私たちの人生こそが最も偉大な芸術作品なのだと言えます。私たち人類の行いの全てが、そして、私たち人類の苦しみの全てが意味を持つのです。